俳諧天尓波抄

五六

中村俊定文庫
文庫 18
742
3

俳諧天尓波抄巻之五

○六倫

○可倫

べし　べしとは、俗語ならん。その外どころにて
いふ詞なりと、脚結抄にいへれど、
しかるべき也。漢文にて可とつづけ
かりそめにも、漢文ならば、應當などつづけ
まじきを、和語のべしを、上下のつづきも
のゝごとくつゞけ、これまでもべしといふてゐるぞ。今をかしくおもふ

員　八重山　かなしいつるかめつるかめ　支考

猿　もれぎく　はなもちなべ　野水

日序　いろなしやあまりつてがたろべ　杜若

日序　そも句よ魂の入ぎれぐ考みてよろべ　日

続　白魚のしつまる時きれはべ　山蜂

日序　吾んなん是迄をそうそうをそさんそで

はの人行あるべ　支考

冬　元政の草の秩も破めべ　芭蕉

こづまそむしみのそうれぬそうそうあそもるんてあるぞ。

うれはそうそうぞ

べうりくりなど。そうそうそうそうぞ

続　救汐こうろびろべき生海氣か　利牛

日　もれぎくいうなる神よべき　沾圃

春　口汐ぐべき清水ぬべく　越人

猿　るせつべきあはそうぐみりく　芭蕉

日　この猫そ猿の持りべき柳うふ　卜宅

日句佳作　鳴のこえ木のまがれそまるべき世界のこと　芭蕉

員　わがまちにいりの世界もむべき　越人

猿　竹のもれちうる猿よそうつべき　元圃

炭　踊そべきなどべき酔そ夢の月　李由

猿　節季は浮世のさだめぐるしき事なし　曉臺

日記　よるの鐘をさむしげに雨もいさゝかにふれり　芭蕉

冬　わが祈明けぐれの星ぞむづく　衛子

員　銭をまうくるうぐりなり　呼水

べし　べしかりなどもおほくはやりたるや、豊なる例みえず

ず　○不倫

むずし、ぬし、ぬしいつはひとしき事なるべく、ぬしといへば、ずしの音の本意よろしきはなく、ゆゑにあるはそぶりくつかくなかなかくず、よらぬもの、めりやすかはかりぬおほく再びうへすぐる話あかさ、ぐくず、ずしいつて路のほどなりひ、ぬしいつてむかしゆくすゑなる、んなり、これ五十音箇の自然のいはるゝひなり、さりながらずしも

時を、さぐさつ論じて作りぬすぢまゆくさきばかりなり、かくかまりれあるに、俗語まく行まりてぬしぐのといへる俗語の詞のくりかへしめかし、されども古事が飯クハズニアルク　湯ヲツカハズニ出ル　などいふ時も、ずしといふそれ所古きのずはよくけり、されど俗言く、かやうの時なりとぞ、ずしいふはぬし、古ごとまた、ぬしといふべきさまの所に、前にいだすずしをいつくし、かく湯ツカハズニなどいふがごとく、その路のなどとも天尓波なれど、古言のずにて、ズニといへんおのづからあるなり、同じ道のまさし、ずの字清音まいふ時も、やゝもちる字のやうなるなどいふなり、コレハ上古ノ詞ナリ　それを濁音まいふぞ、不思不聞のみしかる事、ワが国の太古のうたひより、いとむし簡約にしく、前にいふことさへべし、この事くはしくは後にかへすべし、くくしく口授すべし、んがしあらん人を、ワがつまく問のすべし

猿　この鮑をとらずや銀をとらずや不負さよ　芭蕉

日　淡柑や白鳥もろびと　素堂

日　むつくきを拍みそぎ里がら　勇良

炭　舞羽のあとをまつそぎ線　宇陵

猿　人くまくもれず名物の梨　寺来

日　まる雨や明年弥生尋旧巷　荒蘭

荒　けさのさびしさそぎ南居ル　冬松

続　涅槃像ナルミニテ翁ニ逢テ　沽圃

荒　いく度梨そぎ拾そぎ夜のそ　宇陵

日　名月やなそぎ捨そぎ夜のそ　宇水

続　ゆびさのあくまでかりと鳥　宇英

荒　雑掲やゆきそぎず酒くらひ　李下

炭　今こそ庭のくはをたがやせ　宇陵

日　市中にたよりに来そぎ富士哉　桃隣

続　五月そのもの稗そぎ　卯高

炭　そのまの石塚未着のそる　支考

猿　いづまもまたいつづくべく。おしそぎ。今一筋の雪そぎ。

みくいそぎのんびり。そぎ畢竟八今一筋のそをおもそぎ

ろかさそぎ。

○ドレそろそろみく。即はずの伊達律よかものそも。伐そ一イとそ羽

そあそろそろ。これそ。わがそそそゆそまそそ時そそ。之人のそ

そゆそまそそ行のそ時そそつつ。ずとそつて宇律の意。

歳　なれ加減ようやく出来ひかた嵐　荷号
炭　花もようやく手ごろになりて富橋　嵐雪
見　我ものしり新酒を人のすめやまず　日
猿　雪をのあるじみやげの乳　珍頓
集　馬市をそこで時雨の大井川　芭蕉
荒　うぐいすのちひさな籔をすてゝ　一笑
日　つくりをくこゝろをわすれず雪佛　一井
日　拍子ぬけせぬさま〳〵秋のうしろすがた　素堂
日　むつまじき月をみる白い犬も焼けて　荷号

日　雪の旅そこゝろぼそくて秋の空　野水
○まだ死ぬまでとつゝく句あり・これ古俗言のこゝろなり・
いそがしくまぎらかし・俗のこゝろをよく人物事のこゝろをうつすべし・
あるかなきかのかすかなるをよし・俗言ソモナイハズデナイなどいふ句をいふ
○ざこねの句を・ずるいつがせまるや

ようこそ・上のすれ違ひ・ずるいやつ・一服つ
ようこそ・やすびやの女にはかられし初し　続
くるしさも湯女の旅　芳良
荒生やつもみこむ葉介　野水

炭　時そうらいのおさしぬ　拵えのうえ　宇陀
熾　口上　そもそもあいさつの儀　口秀
俵　宣　海のさち山のさち　惟允
炭　むすめ　体　うんぬん　芭蕉
日　漢籍のやつ　雑談もあり　宇陀
日　ここの茶やなどもうさぎ　日
熾　かの義めらうら　詩論　路通
炭　さてさて雨のふつる六月　芭蕉
日　壁　体たらく　月　日
猿　ここの条　おもしろく　鳥巣

○祇園会のやつこもつうも、とよう事をむりの用こうそ

の事ぶこれこなるこの用ふりけくこ茶なるあり。
ねこんば、士そくらのでこ言楊枝こうき。くらぬこつすをぐ。
うまうかえそこうもも。高楊枝つう所へりけくこんこて。
を祝こそこうもも。仕事ふよみ世事音の俳諧。
かうの茶ず姉をこぐのらぐ。古人の白拍こうくが
ゆえこ。ふれこそ。ふれこそこうぐ。ふれこそこうぐ。
あ高なぐつのもこも。これ落を衣俳こ。
かこうこうぐ今つぐくこ。ふれこそこうぐ。
くんこそのまうこ兵一ぐくこ。すこうく
をる人をそくこ使をこうそる車の席とくぐこ。
続今古賦　そぐめこうぐ　支考
こぐくぐ　コレソノクバラヌトイフコヲ乱ラズトヨ所ヘハタラカセテミスル為ク

人の物ゝ　野坡

日　天こゝろぐ

いづまで・ゝ・ゝ事をみさ

ゝくつゝんでとゝろぐし

○でしほうみあり・これ昇

うそずとゝの淺海と同ど

ずゝゝの差別の新ゝ・伝言のズニゝつゝをいれ・このでは

ゝる句なり・俗ゝ・イデキカイデの事ゝ・ずゝと

もずゝゝとゝつゝ句なり・でとねゝの音ゝゝてゝ

言るゝぐ学ずゝすゝの淺海のゝにゝく大ゝ同ずゝるその地・

ゝゝで・多佐奈理のゝれおのゞうゝあゝく・でゝゝて・そのゝゝゝ

をゝゝくゝゝするゝゝで・かゝるゝのゝようゝくはゝるゝゝゝ

ゝてゝの時の句なり・支考が蕾の松原ゝゝての事ゝ淺ゝく

用ゝ事ゝ・ゝゝゝあまゝ俗ゝまで・おの句勢ゝゝで・ゝの

ぐゝゝゝゝずゝゝゝり・昇このてゝ

てゝゝゝゝやゝれゝん・すゞく句の勢ゝゝ

ゝよゝゝの勢ゝを俗ゝてゝれゝゝゝ

き句なりゝゝも・かゞべゝゝ事ゝゝ

今これを論ずるなり

業　梅桐の葉ゝとゝまでゐる　梅餅

日　うごゝともみえぐ梅ゝ川ゝすゝか　李集

日　かぞゝすゝあゝゝで年ゝる　松ゝか　一晶

俵　老の名乃ゝあゝゝゝゝでゆゝ雀　芭蕉

猿　後ゝゝやゝぐゝゝゝ水月ゐ　羽紅

おく

羽ヲ三ツカチテ三具トセリ・イハユル
スベテ句ノ上ニツク羽ナリ・よそいトハ・中ニアル羽ナリ・あやはトハ・下ニツク羽・
即天糸
波ナリ

日　名月や北国日和定なき　園水
日　名ゞめてとまりかねたる夜寒哉　乃論
日　名月や一夜明ぬる雨の音　不玉
荒　秋の雨そゝぐ氏なき人をさへ　望水
猿　詞なき中のかぶりく　雁　尚白
獣　なかうくよ土間よりすゞ巻ばな　曲水
炭　よるく口上まふし猿五把　岱水

これも隆盛の事にし物のさまにこそ世ごとつゝしみ時結なり

集　もろふんごろ花よ　芭蕉

これも・とをみのうらよもくれもなるゆふべ
なゝふくうゝるゝかなど今のさまにてハナイノニ

モセヌコジヤニなど伝言ふつゝしみ・とをみのうらよもくれもなるゆふべ
イノニとつゝしみ・裏との別よくこそ

集　かゝる侘こそまことの心よ　芭蕉

これもおもてうらとこそ付ぐ
ほそみちくわうめぐ

○滑稽

ん　んとは何の事・ふの字二字の訛属のなんぢてらくいふるごとく・予これをおす言の本源林言のことばづくるをにく・和漢ともに文字なくしてかなしくこれをんのうちよりおもふある形容なるべし・俗ことにウヨウなどゝふとこそ一説んとうとキカウと

…これも・宇治拾遺・小式部ごのより・関白殿のおそ…
…し…と・小式部ごおりも人の…を…つぼねの…人…ごんてい…
…られ…声を…く・小式部…ンとうの…
…うまし…神うもとも…事あり・いまご声…
…のうちの人なしんとも…ひごと…
…ん・人…ふ…ま…ごいつ…
…そ人のうへなり・…ひなごいつ…
続　早乙女…むすんでさん　笠の紐　掛指
けるそ・田植るおのの泥よ…
…ろうるぞ…れぞ・…
…をそ…
続　…
…笠をそやて…人の…　三角

冂　客あるご　良品
冂　裾折そく（性弱之客中　常客
炭　うぐいすの　茶を摘そん茶　梅　茶角
続　うぐいすの　茶つん茶の文　智月
春　須磨寺　汗の帷子あぎそん　重五
炭　引摺をも月のようにやん　鄙も　常客
続　雁来や　梅ふりそそそん　大舟
冂　蕗薹のう　物の名物そん　山ざくら　李由
猿　ひそり　ねよ…宿そん初午　古東
冂　かつら花…そまそん芭蕉…れ　其角
春　表町ゆ…つく二人…そん　狂人
冬　…山　橋…そそん　荷兮

猿　葉尾や矢搦よりまる人となん（イセニ循ケルナ）　千子

炭　うの花乃絶間たゝかん闇の門　去来

猿　月みやんかうの隣の捨瓢　日

○此しは一つの事なり。めやめでてあるらぬなめかどしこうかなり。いひとどむとかくあるは。むをとかはりし霞衣備けくめくいかや。これまる上のねれてまいりがごとく。こゝ字はそろうやていかなりとんなべし。かやうの例といづれもいはず事なり。これをうるゝ時何めとつゞ劔るなり。されどふそのお分るゝちずまらうなりかるなり

冬

炭かのかおのが書くさて思ひしるん　去五

まし

これらしの字濟くよむ詞なるを。汲無の様。奇くよみなる

をひまじと帰わくよむ事し。よく無常をわかく。これら畢竟いんとひとき詞のごとくつらはすれど。奇よみまこれを混ずるす多し。されど差別あるべく。いんさんの中よ。おのづからと出ざるべくさとす音なり。ましてまのの事を兼ていふ詞なり。本末のさきをうるゝくぞちすは「あらずは」仍ほらず八用してはうつ詞の「あとゞぶりく天分波かしるあとみらりはまし備ととは時く営なり。されども事とは二音よ。たつゝる等くあるが為なれ。音節よ。かくされども事なる事し。されど秘ようずるあるをだうずとあるべし。奇まぶつるは入用の数さるわざいしもの悩り詞なり。馬内侍集よ「さくらのあめくちくましいうまをしましとある詞はあり。これてあるまとむはば本末の生けしくりあまくはつて。さてはおりくきの差別をしるべし。されどしんまるの「ゆるん「ともしんるど

いは附。これ未来のことなるがゆゑに。などゝ付すことなり也。さるゆゑ
ぞ。らん。これ。ず此ぞん中の一つを添ふ様子をさしすがた正しくす。
混ずべからず。ましく。ましや。ましかば（かくらしやば そのましかば）
なまし。ましくかども。つゝはつて。これ皆。きし此未来にかゝるをあしく
とりなから。集中例みず

らん

らし。らん。らく。上にいひしがごとく。等の字を言葉につかれるは
その等ありけるんあるがごとし。されど。我等ものて。我等とし
きものを。人の心のうちはかりしらぬをとる詞なり。此ゆゑに
らんは。推する詞とて用ひるかや也。俗には デアロウ といふべし。これを
疑の詞かりとんぞんあやまりかや。故に上にやこうかの疑の
かざしかどと（疑のかざし上へ。いづれ いかで なと なに等の詞のあるかり。此文がうくやる挿頭抄にくはしくみえたり）
うけくらんとくつかり事ゝかなり（又さるらしでもあかなかの上なる疑の詞）
なひなるあ。てうがひの詞となるにくしてあれ。上にうたがひの詞
かりかりけるふ。ただ推する詞なる也。よるそくつかふべし。んは上に
ありがたし

- 続　年の市これをとふべん羽織どの　其角
- 荒　いちもしれて男なるらん　杜若　一井
- 同　かでしこや蒔絵もとへくとなむとん（此や八疑ノや二テ。下二ヨム「何や何らん」ノ例ト オナジ事ヒヤウナリ）　越人
- 同　春あしく船もなくしもうらい舟　日
- 朝鮮ほるくもあくらん友千鳥　村俊
- 猿　さよかしゆよ蘭のそよぐらん　九兆
- 冬　麻呂が月神に鞨鼓とあらすらん　重五

員　月の教うるぞ野水
春　まの緑前供かるらん椹ぞそ荷号
甌　酒ぐそばげるあるかなくん曲水
炭　金俳の細き沖波をそちらん嵩号
猿　もあるまぐ搖かるらん雁の顔昌圭
員　呼ふそるふ杜百らん牛の号越人
春　なそそふ杜百らん牛の号蓮号
猿　そつまそ自慢つそて蚊ずらん笠小
員　そりそうたが罠うくろうずん傘下
　　此こゞトイス疑ノカザレナリ
日　乂寂そやうそ物ぞうてくそらん冬文
炭　泥深をまそ流このぐそらん嵐号

員　狐たぶらかしとや人のそるらん狸人
　　コレモ此やハ疑ナリ
日　まのくれあるまくも狐そらん胡及
○ありんとう句あり。これをハ疑ふ処。此ハ句
にようそれど。かそ俗語なり。何やのんともむづるを。かく
でめるかそべし。字をおかる詞をみそり
甌　そそれを永歯雪の注ゆらん踊
日　毛そそるで志くとかくらん雪
これをもしくそで。苦風そやるらん。毛くらやつで
まつでれとかそくんとうでわがくるあるし。それで俳諧
ここどうがし。續猿蓑ここ副句のロそぐへやる振舞う
とゝ句ある。此ゆくこの句を。手えこれを日物なり。それぐそい。

俗言かゝる事しあるゆゑなり

○らん〳〵はうつて、らんのうつろ也。これは上へ「ん」とめよの

差別をいへる詞なるべし

【らし】この詞、らんとかよへれど、後世ハ哥にもよみ損じける

哥なれども見ゆるなり。これ皆中古人の句指子をしらずして、

その口指子ほしく哥をよむがゆゑに、三りてあるから行てしめの差

別をしらずしてよる事ーつ行てつざるがゆゑ也。差のさがめ事ハ

さく密あ。上のうけざるゆゑなく、らんよりらし、これが事なる

ば、又脚結抄をみしやくるまで、古今これを知らざるんゆう

なしや。これら此詞ようぜず（大てにてはならぬ筆のこと）うけざるやしく、らんハ上に疑のやうつ

まくい疑のかざしかなどしてもよ、らしハ疑の詞とうくるのるい。

後撰に「うくやあるし」後拾遺に「吹つるやうつるなるらし」いとあり

をはじめて、脚結抄に多くいでたれども、これらはみなあやまりなるべし。やまと言葉なれども

ども、かの後撰に挙げたるはあやまりなり。詞は世に転用するものなり

結のほか、正治の頃よりぞ多くぞみえて、されば古くはつかはず歴

くれど、此「やはらしなど」と、決してつかふべからざる事なり。ふたひ

後撰にあるをもそれと例としがたき事也。らんハむかしつかの内

をおもふするにて、らしそのかたのおもひをさとしく、つかひねど、大抵らし

をうしろ不知とおもふする詞なれども、上よりうけざるの詞とよくべき

拾遺の詞にあるも、此歌はよみて上古の集疑の詞をうけざるなど、は

世これを知らずして、つかひまがひけるなり。たとへば「龍田川もみぢ葉

ながるる神なびの三室の山に時雨ふるらし」古今此哥は龍田川に

紅葉のながるるは、この内に、本之三室山に時雨ふるなるべき理の

員　うこうる　誘こぶす　吟水

猟　轡　釣る　比もめる　鰹つり　半残

員　麦とる　手ふれ　弱れる　なる　素甚

日　めぐる　もぐれる　生御魂　酢水

このかた　なる　の降　ふる　や　くる

ふるなり

集　そのうみ　谷地なり　小夜砧　芭蕉

日　月高　のぞむ　年の暮　同

○有倫

あり　此あり　詞　すと上のなり　の事　つづく　紫なるが

御結ふなり　なし　あり　深ぶべき事　ふくみ

いひ、あらはなしと浪むべき事なるみよりの句なり。さればこそ
をりがらく、あらあかなれども、わてて又あまた有といへども、渡月の
くにはくるかはしやすく天爾波なるがゆゑ、かく多はいうなり。
多くしくあゆりの句よみるべし

集　まくてでもあるべきものを唐がらし　芭蕉

日　ふる月や鯛をあれども塩くじら　同

これらは天爾波のあはせや。この次の句、鯛はよくはあれどものあるなれば
こゝもて脚結なり

炭　精進なき舞今あり年のくれ　李由

続　盗人にあふた夜もあり年のくれ　芭蕉

猿　梅咲て人の怨の悔もあり　露沾

員　おもしろやまだなれ柳もあり　荷兮

猿　先たのむ椎の木もあり夏木立　芭蕉

これらはいづれも発句なり。物につけていひて、てにはにあるべき
ことしるべし

○かやうにはりかへ、くわりのはづれわるなり。かるかろしう移
うらやかんりしめなども、かよひて情のなかり。此あるともあるか
このところひの句多く有

集　寒からぬ露や牡丹の花の蜜　芭蕉

日　くすり飲むさらでも霜の枕かな　野水

員　綫を遠ふ尋ぬるかりかり　野坡

炭　ひつつく懸隔さびしさもさびし　野坡

日　くる秋は風ばかりでもおかしかり　小技

猿　菊を植るあとなるぞよも飛かりかり　其角

荒　名月も夜あるひかくれ牡丹かな　許六

冬　月は猶ほそしあれ牡丹かな人　杜国

集　鈴のおとうしろにあれ年のくれ　芭蕉

○くれそむる。かれそむるなどいふごとく。下の事の倫のくれのかたちをくれそむるといふ。別かたちをくわくべし。古今一安かりぬべきことをくれそむるなどよむもあや。そのごとくあれそむるといふ。かたちをくれそむるといふ。そのあや。それどもくれぬけはてぬなどいふごとくにはあらざるべし

けん　これまでかくれんといふ詞のうちにまだくれぬ事をふくめる也。古今にくれんとすれどもくれぬ事なれど。上古にくれんとするもまだくれぬ事をふくめる也。これまでかくれんといふ詞のうちにまだくれぬ事をふくめる也。うちんはくあらんのほどをいふ。そのほどをさしてそうぶ。これ文章の事倫のうちのくれんとするもまだくれぬ事をふくめる也。古今にくれんとすれどもくれぬ事なれど。上古にくれんとするもまだくれぬ事をふくめる也。

いちどろんなどよめり。中世芸まで。いづれうんなどよめる也。そのほどをさしてそうぶ。これ文章の事倫のうちのくれんとするもまだくれぬ事をふくめる也。古今にくれんとすれどもくれぬ事なれど。上古にくれんとするもまだくれぬ事をふくめる也。

うち　これまでかくれんといふ詞のうちにまだくれぬ事をふくめる也。氏身のうちとよめる。

すりあとかなり。よくとひわけべし。集中例あまた

[なり]

このなりは。にあゆのつゞかるにて。那利身にてあるなり。このことなり。前にありやがてにあゆとまなるなり。「ゆるちぎり」にあてし菊かどいはれかなり。俗言にジヤノジヤかどいふにあるなり。御傍論まくれし

続 荒 日 続 猿 日

守梅のあそび業なり野老売　其角

楠も動くやうなり蝉の声　昌碧

暁のつるべに梅こぼれてあられ也　荷兮

かまくらも庭へ入るでからす哉　小春

涼しさきこゑよとあれど猿あり　去来

何事もまてのうちは上戸なり　日

日 続 日 荒 日 日 冬 炭 日 瓢 貝

馬士の謂次第なり五月雨　史邦

目利して家はよろしくなり　馬莧

夏やせもねぶひの中のひとつなり　如真

大川や柳しみゞる雲の奇麗さ　傘下

花さへチマメ色ある酒ぐらひ　長虹

詩しらぬ歌も妙なり神かぐら　利牛

寝みるまでの月かすみなり　野水

秋の葉の露しかかるなり夜の寝　支考

ふり売の雁あはれなり夷講　芭蕉

つきもちらずもされ庭頭なり　里東

菊かなと瓜一下まれなくいねるなり　長虹

此上ノなりハ此例ナリ。下ノなりハ那利身ノなりナリ。ヨク味ハヒ知ルベシ

猿　加茂の風呂ろより北社なり　茂葱

炭　小栗よ毋くも片言ぞてあくれなり　共爾

日　姫魚のうろほすひなり　流香

猿　猪の玄初手うろ泣くあくれなり　学校

員　ろろ次なぐろ駅踏なり　朋及

ヨ　鮪ろろれ女中一井　ろろ

日　十日の菊れをきこなり　荷学

炭　投まもろろまろろなり　狐家

続　支考ぞ伊勢のかたに住おもとやくく時雨のひ

ぞ。むくんかなどおものなり　支考

日　金精てまぎさうりなり桃の花　雲々

員　月の秋旅のろろにこぼるなり　荷学

五ノ十九

日　拾てまろの拳加帳なり　紙人

猿　うち世のろろはこれ小町なり　茂葱

このかなりをなりろうまで。飯を米どやとうて。これるまを

つりかりろ。これ栗飯なぐ人のろまでも定めずてろる

おをなの羽なり。まで。

つりかなり。まめ栗飯なぐ人のろまでも定めずてろる

つりかなり。まめ栗飯なぐ人のろまでも定めずてろる

ぐろうろくの羽ろいあろぐろ事ろうろ

○又かうろて。なるろんなるんなるんおるぐおる

らなんかるめるれでおるぐ

みぞ。ろめるめてならぶにぐおるぐなどいぐ。

かどうまもれ粉なり

猿　うちさゝめきて枝なりしちる梅　史草
員　やゝ初秋の　ひとあぢりなる　野水
冬　冬ふかく納豆ヒミトイフ山三テ加七二ワカレテ　日
日　男がくるまでねるべし　杏雨
炭　茸ごうやや鼻のさきなる汗がる　芸角
俵　蘇鉄なる脳ハ出されず　牡丹ふれ　風流
冬　納のやうに　賢なる女　ろくろ　重五
猿　うのうへ寒き寺の庵とつゝみかなべし　芭蕉
幻住庵
日　小刀の　略双なる　細工箱　半残
凱　唯四方なる草庵の露　湖風
炭　春ふかう　ひとつなる細もとで　野夜

俵　飯椀なる　両種こさゝむ　史邦　澡
炭　このまゝハぐゝもり　花のもとで　惟然
集　うずなるこゝろ　さゝ柳　半残
荒　さゝ蛸や　昼のうち　蔦蔓
日　昼のうち　さゝ蛸や　両種こさゝむ　祭
日　さゝ蛸や　両種こさゝむ　蔦蔓
日　春ふかう　ひとつなる　細もとで　角深
俵　山のそよ　ぎ　ねと　椒ことの　かすかなる　林什
員　俵言ナとつゝ。此なるこゝろ　一笑
炭　人のこゝろ　ぬるゝ　ぬるゝ　楽か　もしごろ　里圃
ふるゝなる。そこ。そこ　俵　哈水
凱　素布　ひとつ川　春ふかう　ひとつ　哈夜

猿　すこもる松のこぶりくさの　志男
員　年ふるまでもあるうぐひすの　傘下
冬　冬の夜の日のひくれなりけり　芭蕉
飄　風呂の加減のこぶりくさり　望梅
猿　幻住記
　　ひだるきまぐれとみくんぞ集のすがるかり
　　うらうら　芭蕉
荒　灯ともしうすきうらうら梅の香　汎雪
内　いちじるき男なるべしなまんだら　一井
春　まの旅薄供ふるくしん綿ぶるく　荷号
猿　生めるまぐさかるくしん魯の良　昌葉
徒　弓因とる法なるやら　袈裟　支浪
員　碑ざあの小水の飲まこうるやや　傘下

春　一夜うす寒ふるを宿は馬うま寺をあや　望水
猿　ひだりをく小田と土もり出ちるやや　汎雨
円序　このろれをくれこそぶき時をあや　其角
荒　汎雪草なくつけるあらぐさ　望人
員　八重山吹をはらちるぐー　望水

○去倫

これを同ぢとる裏なるを。つぢく肺結こしるもの也。こゝ
とく。こゝなるをかこゝつゝる事をこゝ。也こゝしを享のめと
いふ。けだものこゝ。去倫のめこゝ。テレニウタ　ヤウニナル　段ニ
ナル。所こゝろこゝ。テレニウタ　ヤウニナツタ　段ニナツタメこゝ
何かり。此めこゝ音。去倫こゝ。不倫のめこゝ。上の

河よいうわくのうち、まくらだ「ふ
らあとつて、不倫のぬかり。「きゝあとつく、去倫かり。「きゝあと
つて、不倫かり。これらにくさ、よの宝、去倫なるさ伊緯とうけ。
不倫かるく阿佛をうくだかのよくつうれるり。コレ伊緯阿佛ノ
コノコトニ委レクイヒックレガタレ
去倫よし不倫よさだのよくかれだ。よぶくきるう
るでし。去倫の時く、上聲よひ、不倫の時く、去聲よつかり。
つて、俗語よし平上去入あるものをれだ。いい誤てこしをさだし。
この四声、口ゞ國だくく平上去のこと忘だりにく、入声ハ
古このさるかり。この三忘だつて、それ
さもさだりくかく不倫去倫とつて事なり。これらのさハ音
家をるびくさるべし。かゝのものハもつでし。かさる言つるか句

かゞくなくて、自然とその事ゞよるく。去倫不倫をわ
うくものをれど、つゝ時ゞよくさ。ようやゞさるぶべし。と
のゞくかるとうつかり。この和俗不倫よ去倫ともをてつよ
事かりとを忘て

荒　芭蕉

この句ゞ、打物の事ゞを忘れをうくなり。すゞくせの人ハ衣
ゞくく事むりくされゞ。これらゝ称ゞくロすくさるものゞ
とり物のまれるやうゞ称ゞくロすくさるものゞ
かり。このぬのくく。今ゞ事ゞくみくさるゞ。うろ〳〵頂ゞかくと
もゞと二物なるゞ。そのくろよゞくれるゞ。今ゞ事ゞくみくさるゞ
ろく称ゞとひくろ物のゞくくなるものをうゞとくさるゞ。これ新指ゞ。

日　十九日　雨　尚白

春　初春の梅　　其角

日　三の巣の鶯の梢へ入ぬ　　几圭

いづもまつうみづくしくもりてくらき雨の空をとぢたる

ごとし。この野梅が匂ひ、こぼれ珠の白く梢をはなれ

くるものゝごとくにして、旅わび人の心をなぐさめ、

とりわけ昨日より今日へかけて昼寝をなし、ぬれ

ごとに世の人のをとづれもさうひざう

○やまとつゝみ、いづもより淡路へ渡るなり

荒　尺ぞうりそやたゝきもある柳かな　　お春

炭　すけるる時の為の薪のそげうさ　　五湖

うらわく蝶の羨ひいさましある　　芭蕉

ろしくつゞるべし。すべて「ちる」「なげる」などゝ、おさまる句きもの

なり。これを、「ちらし」「なげこし」などゝ、おさまる句ざまの

さうく、するをみする詞なり。その物のうらよりつけか

るゝをそのうらにうけとりてかくいふなり。なほ此ふぜ

ひこゝろをつけてよく味ふべきなり。

○「ひさご」の「ひ」の字、宇佐神宮にて、「ひ」の字

綿をかけてつゝみ、その事一次在て、「ひ」の字

ごとくつゞるべし。

日

ふるきのこゝろあまあしなりける趣なりていづれかよしと紛べし

荒　寐入るまでもの月きやよ花の下　野水

猿　こひしなど我影ぐあけちらしぬず　奥州

今寐入るといへど。やよひの花し。こゝに寐入るといふてハ不都

いひべきなり。又今花ちるを。ちりぬるべし。とくと意志るべし

まえ。ちりぬるもちるべし。いづれもよくしるゝものが今用なる事なり。

かといふて

○にといふも母ぬの俳諧にかよひたる也。これをあとにいふ場とぞ。

かるくのべられたるをいふ詞なり。なとらへ似たれど。おハむつかし。

るのちがひあとかわくある所をもしていはむぞかし。みし｜ほど

まるんまるるまるりまるし｜にけるか｜にけるかなどつるは脚結と

継くつるなり

荒　着てたちし羽織ハ縁の入さかり　野水

拾　なりにけり〳〵まで年の暮　芭蕉

員　雪ニより踏そへてぞ杉ある　冬文

冬　花よなく棟の徳とすまひたる　芭蕉

荒　時々は蓑干さくら咲にけり　除風

同　紫竹のものさびしき宵の雨　卜枝

同　茶の花乃扇を蝶にあけにけり　荷兮

同　取らず次帰るむ時をおそはれり　一井

同　よ川魚をとびる跡より鳴にけり　一髪

同　投りし牛蒡湯く鳴なきり　素秋

同　我ゆきてねころむやぞく成にけり　杏雨

続　わが顔もかづしく続すなりけり　是楽

集　旅鳥古巣は梅になりにけり　芭蕉

続　夷講酢売に袴着せにけり　同

日　ゑびす講鶯も鴨になりにけり　荷兮

荒　笠をきて[illegible]ぬれし[illegible]にけり　古梵

日　咲にけりふだん寺の紅牡丹　一井

猿　[illegible]猫の妻くゞされにけり　素男

春　朝がほは[illegible]一[illegible]に咲にけり　亀京

炭　うぐひすの一声も念を入にけり　利牛

猿　[illegible]猿一[illegible]咲にけり　去来

炭　年貢すんだとほめられにけり　芭蕉

春　笠白く太秦祭見て来けり　野水

炭　[illegible]掃除してから椿散にけり　野坡

猿　家ヲヤキテ　焼にけりされども花はちりすまじ　北枝

日　仲秋ノ望猶子ヲ送葬シテ　かゝる夜の月も見にけり野辺送　去来

春　鶴[illegible]大津の浜に入にけり　旦藁

炭　そら豆の花さきにけり麦の縁　孤屋

員　芥子の花とり[illegible]にけり　松芳

日　月のかげより合にけり辻相撲　越人
此前句「さしやくしるの露きこえける」ソノ咡カザリシ人マデ来集リケルコヲ思フ心ナリ。コレ前句ノつるトイフ天尓波ヲウケテ、ソノサヽヤキタリシヲ現在トシテよりけりトハイヘルナリ。つるトよりけりトノウチアハセヤウ、後世ノ人ノ及バサル境ナリ

春　[illegible]をながむる中に暮にけり　荷兮

続　三日月に草の蛍は明にけり　野萩

○発句とハまた此けりの衣裳にかゝる也。衣裳の紐くゝり上ゲて[illegible]

○来倫

き

キシクシ・ナゴク　ヲロソカニセヌ事ヲ云フ詞ナリ・ケサウニ伝ヘコト
デアヲメ　タナドノ初ヨリ終マデ枝ノ花　ヨ枝
ムカシノコトヲ思ヒ出シテ云フ詞ナリ・ソレモ・コヽニアルヨリハカナ
ムカシノコトヲ思ヒ出シテ云フ詞ナリ・ソレモ・コヽニアルヨリハカナ　荒
ムカシノコトヲ思ヒ出シテ云フ詞ナリ・ソレモ・コヽニアルヨリハカナ　集

酒ノアヂワヒヲ云フ詞ナリ　芭蕉

俗ヨキトキイタ　キトユカウナドニツキノ字ヲヨメドモ・モトヨクサアリ
シヨウヲスルヨリ・コレ加伎久計古ノ音ヲカリテ也・コノ有ニ五
ツヲヒラキ初ヨリ終マデ有ノマヽニ云フヲ云フナリ

猿　ヨグレモヤ　勢　毎　千那
キヨミヤ　ヨグレニホヒテ　ウツリケリ

け

茶ヨ来ノ字ヲ用ヒテ・ケノ字ヲヒルル天ヲ波ナルヨリ・ソノケノ字ヲ
ソヨヒラキ初ヨリ・コレドモ・ヨク終マデ有ノマヽニ云フヲ云フナリ・ソノケノ字ヲ

炭　天満の水をまくわすれもの　野坡

炭俵

人の事もいふけぬ人ぐ　なるこゝろやさしく我まゝ氣まゝなる人さま〳〵とゆゝしうれ
しるものなり。附句もさこそ天王寺詣の人多き中にて一首の手のてゝこれぐら人會ふ
目をよぐざる事をぐ。古人もこゝろかく骨折るゝ。これまでもこゞぐ

某　馬と馬よぐ會ふりほこぼす　飽可
月　おもふ人鵜川々々金の月　舎岱
炭　金の月ねぐらの門を出まぎる　野坡
猿　おもしろき事一紙帳とをりく　里圃
続　きゝしまゝ歸てまぐら蚊の声　胡故
月　晝寝のくせなほあしゝうのまゝ　芭蕉

員　さびまき秋を女まをりをり　後梧

日　うつくき鮎うるうるまのち　舟泉

猿　炭竈よ多賀の猪ぬ倒まをり　元兆

甄　一貫の銭ぬひりとかへくり　曲水

続　嫁入れ門しまをり許をき　許六

猿　都まも住まぐまをり角力ね　去来

員　産毛ぬである軟帳を汚をり　一井

炭　黒まをり中のまだねのゆふ野　丈草

甄　深ぐまをり供乃さみし　蹊

春　春くの小牡丹雪れのこりく　丘芝

炭　梅まをを二タ月ぐりつれをり　朴平

蒜くまを数香ま遠ざりくり　嵐蘭

炭　赤みその口細明くり梅の花　陸刀

日　うめ咲くく河なのくぐれまぐり　朴平

日　お百のうけなり二月ぐり　野坡

猿　三日月ぐ鰹のあるまぬかくり　之道

員　桶のうぐなれ仕巴まを　里紫

炭　菊ねれもしも銭くり花ざくり　嵐雪

続　産屋のもまぐまを女房よびまを　沾圃

続　尻汁桶のまをくりまをり　几兆

猿　まぐ動ぐまをのくれちぐりくり　傘下

員　ゆめ原あぐまぐ石まのぐりをり　志平

炭　田ぐ持ぐ花ぐる里に生れをり　羽笠

春　賄ぐて隠ぐれぐりまぐ梢　李秀

続

炭　そま川をあるきて　陳　冬

猿　木履ぬぐてそぐにせり　芭蕉

日　みづくるく　晩る野をゆくれり　半残

員　もさもさと　こころもめかち　荷号

炭　羊羹の　板へてくり　初もぐれ　蒲口

甑　越路の　ときて　廻りもの枝　芭蕉

荒　そる時　ひなて　廻りもの枝　路考

日　切そのあく　悟幸　をくり　野水

日　さくく　吹里をねすく　無名

猿　ものそぐ　多牛　葉うり等の　未竹

徜　るぐそく　我るのまゝと　譲りうり　文草

荒　つまそくまくるもせく　百家集　一井

日　すぐくと　歩むのけり　土筆　蓼生

日　ひりすまて　おそひりもの　山　冬杜

日　るるりく　稲すりのもかりうり　ちよ

日　雪の富士　夢包　ちよれり　晩水

日　すぐくと　詠る指りてぐし　蒙

日　年男　る事おけなりうり　日

日　湖の小　水るりうり　五月雨　去来

日　亀ども　出る幸をこうり　文草

荒　敷すむく　梅の一本　杜景うり　杜の雪　史料三ノ人ミ台ヒテ

徜　枯架くる　鳥のそうり　杜の雪　蓼

日　さくる　氏月そ二人　なみれうり　等

日 牧のやそくま陰のうくひすり 一笑

日 ほとゝぎす人ノ銭別ニ 隆凡

日 ちる花にうぐひす高野ニテ なく 杜岡

続 九十九髪しらぐ芽うづ 杉下

日 菊畠まもる座をにげつゝ 馬莧

日 園栗のおちてころがりぬ 石佛

日 沐猴雲とすめり 烏兎

日 栗の実梅擢のうれこもれり 杜岡

菜 ぬすびとをおもふ 党

日 そゝぐあまつらゝ 二水

日 ゆふぐれそゝや日傘 拙假

続

○くるゝ有倫ノ例ニヘガハスベカラス

まゝ。まゝりてなりぬ。

る事結をつゞくもつゝみ。

時くるの字俳なまで。

いつゝみより

猿 蓑虫に栗の花もちらるゝ 猿雖

この句など。くるゝまゝ。

とうつゝ。時雨の栗のもひゆるよ。

つゝれさゝ。ゆくへのみつゆづゝ。

とゝれるをもつゝみほどの

いつゝみ。

夫木抄のうた同じくもちぐれ。

ふるくなるものゞ・かゝる
句もふるくなるゞゞくさう
う・は産ロ拘のよのりる
きまりかしぞや

亂　ひとりある　あ・雞（チャボ）かへる　瓊
猿　三里ゆきもの　道こう・へけむ　素
冬　言つくる　をゆくてぞと　杜國
炭　よもそゞ　死の物痛をおさへける　野坡
猿　ゆくまる　（ちゝを惜春）迫行のくことをこゝろる　芭蕉
口序　伊賀　細・くる山中・にくゝし　其角
荒　ゆくゞ　ゝをせぶをこゝる　酒の肉　日
亂　くれのよ　味のつくこゝろわれ　海頌

くんとく・まえくる
秋るけるなるこひあく・るさゝる事をゝる句なり・かと
ぎのんえゆらくみゞ
しくみず空あなるゞ
ゝるそれかるゞ

員　なく事を注くん女をうゆび、　落梧
荒　多雲のゆ（物憂）ちく折くんつくものがを　永原
集　強食（ヤイ）いまくく出けん玉川鯉　芭蕉
荒　すゞくと山やまるくんまざくく　一晃
猿序　ゝるまち新務のなりひをさけびくんとく　其角
日　幻住記　むり・住くんのゝまんやくく住ゞ　芭蕉
拾　猫くんやまの木ゞくの秋よゝで　日

俳諧天爾波抄　巻之五　終

御蔵書

○十二身

○氏身

て

てとく・かるてつふるもの
んなり・あとづ・逃てゆくこと
みゆくつぶてつるさるもかはを
礼・人のまよつやもる物にて・そ
持なとするゆゑなり

荒　おのみちくやぶる雁の

芭蕉

いまこうるもまたこうやく
モナホサズトイフ心ナルヿ持頭抔ニ塗レコレラノヤウ
イトヨクオカレルヨリ・俗語ノヤウニハアラザルナリ　さわぐてはすべ
て同言ふつるるものとんのやうづなほよるるをと
さ手初しとるべ

炭　栗を苅めくひろき畠地　杉本
日　みくぶり杉ありめく楽のふ　栃備
日　なよやそく鳥一羽年のくれ　智月
猿　沖うすめて　よひ寒さる秋　蔦葛
荒　月もなくて　海のむなりふ　日
日　き物よ　まめく車うれ　素秋
日　七草をふしきたがてほるふ　俊似
日　なふくてねすび送ル神なすぐる　秋の稼　一井

六ノ一

猿　ヌぐうや　裸ぐ出て　美やまを　嵐蘭
日　五六十海売　普うて　毅一ツ　之道
荒　門出分ふ　ふとく　鈴一ト　荷ひ　内習
続　きて　ふめく　帰て　ふくり　軽のふ　朔及
炭　物　くふて　ふめく　海のくれ　ふくり　梨
荒　つて来て　ふよふ　ふくり百　ふ　一井
続　演劇ふ筆（イセニテ）をゆくやて　手のくれ　呂丸
炭　よふくの月　ふからく　旅大立　俤
日　魚店や　ふくり　芭ふ　ふの月　里东
猿　さくぶれよ　ふおつり　抱くめぐで　九兆
猿　田の畔ふ　早苗把て　抱く　亜　翠
猿　事まぐる　里衛おうく　秋ふるく　史邦

炭　江戸のちむらの意ならむ　芒菴
　コレハ上ヘカヘルテナリ　のりわて江戸のちむらぞ
　トイフ句意ナリ
貞　雪ぐれよ寿よいづる雪うけく　荷号
　コレモそづるトイフ所ヘカヘス為ニオキタルテナリ
猿　其のまゝ仕舞ふくかつる経机　雪秀
春　やどの畑ぬきざみくまなし　景業
員　けしまなかりて冬のあとときく　一井
猿　うまなかりて猫の恋するあめ　雪菜
日　鶯やそ川金くの月　松風
日　片隅に雪置うて着た月　九州
日　人を家を買いやくされて多忘　芒菴
炭　茶のうり置きとさげく春出す　雪秀

日　其まゝ仕舞ふて宮ともちふく線の影　日
日　話すかくまもみやて　荷号　枯　嵐雪
飄　月ふらく俄の内裏の　司　深雪
春　ふて雪するわらくの雪月うけて　冬文
炭　ゆくくおもひて雨ふりて　秋の風　梨半
徒　おもひて竹うる新のやまふ　雪秀
日　初雪ふて降ふて深し　氏乃土　芒菴
飄　砂のふまの　痩くふくく　里東　芒菴
猿　軽乃口愛をうふて氣味よし　芳人
員　月の名書をうちふ申よ痩く　雪角
猿　こ乃末戸や演のさわくそ八月　雪秀
日　掌痩よぐわてくもも丸　子那

続　雪ふりつけく枡を買ふ人の馬　史邨
荒　ふるともなくふりもして田をまふ嫁ふる　杜宣
日　ぞかつぎてゆく天鵞毛の紺ぶくろ　景岱
続　ゆかしくてうき紺ぶくろもる柳かな　惟我
荒　神さりて松の葉のかくれ家　荷交
日　苓る畑や生ぶまるまるとして仏生会　杉古
続　よそに寝て純子の夢も忘れ　乙州
日　さそひあふて出る元禄の春　支考
荒　雪ふりそめて里も寂けく　杉古
続　ふるまよりとどめて庵時雨　里圃
続　ふるもふるもしぐるるやしの月　我眉
炭　上塗なりて洗ふおく壁　翁
日

日　ぶるまふく　野坡
日　明ちく冊子を敷行を負ふて　翁
日　箱こらつく　野坡
冬　拾ふ木ぬくめる　羽笠

○これつりのふ・そこまきふ文蔵部屋ふ

集　山もこもれ窓柑の多丑黄ふりて　芭蕉
この句、蜜なれどもみな夜ぶ時ふよめぼ。なぐふくふう
ひ拾ふるてりの字なり

集　きよくきうん耳ふ香焙てるぎず　芭蕉
日　徒芽や苅のさうりを貴ゆて　日
日　ふぐいゆくやふ軟縄ふふうふく　日

この句、上へうるんうるてりの字ふ上へうるんうるてりの字ふ

炭　すみ　　鞍　くら
褥　しとね　　韉　あおり
日　ひ　　鞦　しりがい
馴　なれ　　轡　くつわ
夏　なつ　　鼻　はな
炭　すみ　　革　かわ
雞　にわとり　　野　の
被　かぶる

炭　すみ　　精進日　斎良
ふめく　てくわざなどのものぐ
手ふれ　神ごとにてとぢめくぶ
やり　ふめく　タラバとのほど
○其外　てん　てまり　てを
てぬぐひなどはうちもち

員　かず　　一井　いちせい
荒　あらもの　　芭蕉　ばせを
日　ひ　　胡及　こきう
冷汁　ひやしる
○てんとつうの事　ふそのう
とんとの間の初のてんぶ
ふそのうとつうひてんとつう

荒 山あひの花をりめてこえもらす 心苗
日 くまぢよぶ郭公雲の隈 二水
日 うれのこる月をうけもつ時鳥 李桃
続 春雨のそのゆふべ似よりぎびき 圃角
歌 うき雲を散る 薄痩 ぬり 三秀
集 誰すうが海と似よりうきの春 芭蕉
焚 まくらぐさ二階を建よう 祇 梅僕
員 おもひあるつもりどれも言田汎 約言
春 見つもり世九分の月さむき 荷号
猿 海棠のもち満よう夜の月 魯町
日 雨こそ見よれよう 元志
続 涙横 里圃

たう

どうあるとつまるのはぢよう出やるこゝ。
うるよびこゝ年ぐうびゝ。こゝ
手井れなどつゝ伝てゝあるなり

猿 詠ちこゝれ 啼 まつもう 芭蕉

秋の空　其角

猿簑　ゆふより雨ふく狐狸かな　芭蕉

いづきとよろこぶ声ごゑ。たゝく。てのうらをかへす。狐みるべし。たゝけば。はね住菴記の「かゞみ」をおもひ出て。狐

狸の字をわざ〳〵いふてゐるなどいふ

くさ〴〵の物しる何とぞ中ごろ

とにかくみるべし。ふるとこ

いふ。ありなしかあるくつ

いふ間さ。器せる羽あるやみるべし。信さま「ねつかれ

ふるなどいふ。これ

の初ものなり。これてとら

十言ほどのもの〳〵仕ずまひや

吹とられる笠とりよせ　利牛

鮭の皇の憩ひ　秋乃水

集　手うやく猿よぶ程の雨　芭蕉

冬　つま木こる人をみうしなふ岸の霜　羽笠

炭　うんでくる雲の八重の峯の月　梨一

春　うつるのそ〳〵ふる雪それ〳〵月　猿蓑

猿　さし木にまきたる月のおぼろ夜　凡兆

炭　老僧も袈裟うつくしき花見かな　之道

冬　俳諧食ふる魚をどまくり　芭蕉

炭　早乙女よ　こゝろ　葉鍋
猿　二階の　雪　笑ひ　秋　芭蕉
炭　初鰹　の　こゝろ　野披
猿　やりい　初　こゝろ　史邦
員　そのづよ　こゝろ　雨　荷
猿　ほつれ　こゝろ　雨　凡兆
猿　鼠　すゝ　こゝろ　路頭
猿　うぐひす　こゝろ　芭蕉
続　毎でくれ　こゝろ　此等
員　手　こゝろ　雨　東
炭　揚ぐ　こゝろ　雨　翁
猿　里人の　こゝろ　雨　岩翁

続　職人の　こゝろ　雨　二労
炭　雪の　こゝろ　雨　翁風
猿　大工や　こゝろ　月　羽紅
猿　神送　こゝろ　雨　濁
続　李の　こゝろ　雪の土大根　芭蕉
続　ひけ　こゝろ　雨　除の雪
猿　蚫牛　こゝろ　雨　越人
員　こゝろ　雨　越氏
猿　机や　こゝろ　木賀の笹　荷
続　もち搗や　こゝろ　栗の刺　芭蕉
日　橙や　こゝろ　雨　嵐蘭
日　石臼の　こゝろ　雨　閑指
荒　つき立て　こゝろ　雨　支考

（猿末）
（炭下）

口 あるまゝをなりそそる冬北窗 荷ろ
口 花の傍 篠ふ砌る夜半 芭蕉
口 集れ凪つるげる 白蔕られ 野水
口 元日や 一笑
口 立初て若草みる 明ぐ 急調
口 土摺や 塩車
炭 鞠轆ゝ 為有
荒 蔦の葛 七抹
猿 俳諧と竜の大ふんこと 主角
序 ○俗言と夕とをつゞこのふしあり。即夕と俗言のまつうらある句也

炭 家のまぶまもる あくびみより 利平

亜のつゝ 里圃
古言にくさ。ふる。つる。ゆる。ゐる。ゑる。ひる。ける。ゆる。ゐる。ゑる。ひる。ける。
てゐるる。俗言にくさ。ふる。つる。ゆる。ゐる。ゑる。ひる。ける。ゆる。ゐる。ゑる。ひる。ける。
る。事と訳跡あるもの。
にくまのごとくする。倒句なり。
ちをとゝめる事難くぐ。

つ はく。前の字儒なる音をわぐ。てといふぐ事の活用
ふぐべ。物の一字ほどの物をいふ。
つる事。すくけるまでの形となりとゝぐ。
まるぐいやすゝ詞なり。

まとう。如き。仏体なる。ほとけ。絵のえがき
なども。絵の字を。ゑと用ひ。ゑぶるなどもかなりつづき。文書を。ふみと
つゞみ。ゐなか。源氏物語などゝ。ゐの字を。い。こゝも今伝えて。ウト出ル
などゝ。ゐに同じ。まづくろのはをいふ。今一つ。うの字ある
みとゝもするなどゝ。ゐとうとくはつゞまるなり

猿　いわゝくとん　路通

これを。誰が。あれまあれ。いおとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。
ゐとゝ。ゐとゝ。そゞろ。ゐんとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。
事ゝ。そゞろ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。
ゆくつゞまどゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。
ゞる。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。

猿　観音の　ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。ゐとゝ。ゑとゝ。

員　おりみさま　押あみ　ゐの井川　野水

荒　わくゝれ川　ゐ帯迅速　芭蕉

日　ゐ川ゐ　ゐつゞまる　ゐの果ゐ木ゐの秋　芭蕉

ゐつゞまる　ゐの島ゐれ　傘下

○上古ゐつゞまるゐつゞまる天ゐ波ゐ。冬のゐよゐ。ゐつゞまるゐ
の字ゐ重五ゐつゞまるゐり。ゐれゞゐ。上古のゐゐ。
ゐてゐゞゐ。ゐつゞまるゐくゐつゞまるゐれゐつゞまるゐ。上古のゐゐ。
ゐ。ゐおりゐゐゐゐゐゐ。ゐつゞまるゐ。ゐつゞまるゐ。
の島ゐつゞまるゐ事ゐを。ゐつゞまるゐ。ゐつゞまるゐ。
ゐくゐつゞまるゐゞ。ゐつゞまるゐ。上古のゐゐゐゞ。
ゐつゞまるゐのゐゐゐ。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。

○はるとつゞく、川とつゞけたらしろうとはやく詠む詞なれ。
されど去来集に「雪の中ある花となるべき、その雪の消ては
今のすなしねどされば今の梅のしろきはやくいひやするん
なり

貞　きやくことの咲きこえける　為守

これらく前句「桁木の時気れんおつくと　野水　けしき病るのつく
ばくといふ附る句はく、即うし木のされをものしられしるき、
なまーものんばく　つるとるやや。この句は「月のかけに合
まかり辻相撲ぶ人此句まてはるとよくんなく。まかりをみく哉
行やしたる体。よくはたまでしとばくし。まかりの条　みえの
つといふて、四季し時のさかをとるや。かといふて今の句合る
あだ気のんれゆゑ。守しまからく豚るとしはまりてし。これのる

七部集のはなくらきといふをみるべし

荒　蓑虫とされける梅のさかりかな　蕉笠

○つれ〳〵つれ〳〵なとかゝしてもはるのはじめ。つれ〳〵つれ〳〵のころなりとみるべし

荒　鳥籠のうきめみはれん（放つ子）ほとゝぎす　季吟

冬　すてしをく紫蘇のふけよのびけん　野水

集　きさしや草餅のやくいではれん　芭蕉

日　白芥子や時雨の花の咲つらん　同

はる

はる〳〵即つゞくといふ詞なり。はるかなる詞なり。時候かなる
くらくらもるるとみへ此詞のはるかなるべし。これら一ツびけり
よかりける也、あまもろくるぎが、移そこにつゞく、ありけるて

員　とりしまる水出てはまの風　　雨泉

同　墨染も正月ごしに見すれば　　野水

春　緣をとらはぬいそぐ鳥が代　　旦藁

員　嵯子の縄しれ裾によりとく　　芭紅

冬　引ずる牛の塩こぼれけり　　杜国

員　胸所にく千魚の加減かけて　　釣雪

猿　木曽の酢茎にまとひけり　　凡兆

瓢　菊まく節よりさく法のつまり　　曲水

［し］

○之身

これをば、動くのしと名づく。世二過去ノし（しともいふ）をはやる志

家のしに、あらしき、よびてすみし然、これをしごぐあるまり

しるしにて示まする詞なり。これ五十音の本意にて。志家のし之身のし。らまよひし分れど。その法の成所のるなるにくかくをわのるし。すべて伊勢の十音にけしあたるあのものりことを示する詞なり。また文作語に。むかつのあるからまへごからひゆくなるわざ。この伊勢をうかがふむかつのそ事をしるよまするへとも知るべし。けれ過去との心きてそや謂のなかなり。されがしこうし之身をとてつるも。志家のしとよもつりの方ふかつ伺まやとく。この之身に。既往のる給以例の句をとどいふなり

荒　廣庭に一本植しさくら哉　　笑草

猿　すゞしさやこの庭をさく佗まてし　　菖良

荒　きりしが雲のかつ所あるの所　　野水

日　みちのくや　雪みし梅をさぐりやり　杜下
日　雪ごもり　大根る雨よこころへ　芥子の花　素延
日　夢ようそ　ゆりの　野水
続　ふみ仙や　結婚されりの　曲翠
荒　明日なき　かくれ里のなりやや　泥芹
続　封つけし　庭おこやぐ冬　桂　魚眼
猿　わが事と　鰍のにげし掘芹か　史草
員　引捨て　車も轍の　論　野水
続　うぐひす　や　照りまし　夜の隅　等義
続　なる事の　いろうも　あらがつく　芭蕉
炭　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（十三）

猿　ひとり来て　ぬくもりやかなさまし　春の雨　芭蕉
日　ぬくもりや　此ごろ人の　いつも小御門の道　素堂
日　炭　　冬
縁さそひしげのうらみのこつて　芭蕉
前句「春ふけてやまぬ淫声かな」ヲ荷ヒコレヲ
ミレハユヘニデ人ニ物ケラレテアハレザリシ中ト
ラレミ句意リ。「ハ其女ノ心ノ内ノ外ニヲミスル為ニテ
コレライトヨクオカレタリ　杉牛
炭　うぐひす柳を今こそ　仙水
続　いく年も　仰れどこそ　文考
会席

あるいはうたよみつくる。佐言
こゝろにそまざるものなれど。今の世のすべてをみるに。佐言のタ
をおもふこゝろのふかゝるにまかせて。
き詞ふるく。その中よき。つゐに
あるなり。ひとつよ。メとうたふ
ほかのやまとの歌をも。まねびて歌人と。よくふるく。タとぞ雑多よ
しくおもひて。つゐにふるくなるめるなどあるべきことぞ。中には文句
らんナドノアタル 俳諧も院の今
のしをつゐに事あるまでひろまりたるなり。いよ佐言のまことの俳諧
なれどとく。ひとりよがりなるものくタとやくうたがき

佐言　角(スミ)ありし　花のタ　太草
日　　をまちくらすくるひとやの鴨　沾圃

日　腰うちはらひ一藤枡の下　小言
日　平暗ニ花の蔭　文考
荒　麦蒔くや寺毒ありといふ　男兎
日　うの山や　形ノ　佐言の月のゲ　杜若

これらの句ゐづれも佐在のこゝろにて。言ふべきことなるべし。句ごとに
きものぐし。續猿蓑ニ芭蕉一封つゐに人をまねる月のこと
ゝり句ぐ。佐在ふるく村のつゐ
富あるく村をうけ一不がけ句のこと雪となるべきなり。
の字ふりかけ。これの字別
のごとくなるまねびをもあれど。これのごとくなるものぞ。
上の句ゐづれよ。ことなる句ぐなれど。佐言のタとこゝろひる

この句は、上の何ごとも
さるべくもあらぬ人まぎれ
ちうでといふなどの心より、俗さ
これをも関せぬ人あれども、
むらむら千鳥（スミ）ぞなくなり、此
し事を、其関をそぶやく今
社のこと今こゝにうつす、即
むすめしこゑべー、泊カストハ、不言ニシテサトスヨシニテ、ワガ意ヲ
カレガ心ヨリ知ルベキヤウニナスヨイフナリ

人まぎれとは、捨てよみぐるしき
とをいふ、今を、昔のことゝ
より右をそぐまでの間、うつくしきをいふ、
狂句ぢ情の急なるこゝろ

情のなつかしきをいふ、
にしきもの、此天保度の事なり

荒　なまくさく
　　こゞのそろたる
　　つゞあげーうの
いづまでも同じごとく
服そろひぐで、
これとうり、これわのるどさ
いつり、これ落その関ぐ言
とろべー、コレラ皆カノ
スミテヨムベシ

○もうでもしりぐなど
をいふ、

巴丈
元度
後仙
ぐあるもの
ことをみるべー、白云
ぐ、殿舎尚今を一下
の句解こゝにあるこ

○咩利身

めり　この詞をしるさるゝにて使ふ事あり。律の正儀にすべて
ることを、カルといひ、すこしなげやると、メルといふ。そのメルといふ都く
かるへり。いりまらつゝ、大抵其の正儀にしく。すこしなくして有る
第昂この詞の第なり。かくのことくあれ。定めてよくすべからずす
しけくめくる事あるんと。めのしくいふて、されど。まりしけば
先くらべかけ。すこし定めしれぬ所あるものの用ゐとなるべし。こと
へど。京今の「ふる所紀要ぶれてながるめりしと言ふは、ながるし
ともいふべけれど。十に八九を紀要に相違なしとすこし定めれ
ぬまのしくめかしたあるし。これ録といひるさしんがくあし。此所に
下句「ふるるゝ録中やまへかんしくまあるし。さりとて今ひとふ
んべきすあるく。けが大州國ハすべく何するとされかりそびむると。

ちくやがる行るゝ所しなるふをしくてまひそ。こうひ人
容ゐるも。言ひごしかりて。世を益かわざし。さらで何すゐとあれ。
人のりふりとりを所として。ふしゝまわが様の通解するにいたれりて。
よろ所言行しあまし。かれがんすらゝおこしん事をもなしとす。こゝをもて。
事がらまおきく。かくりと定めくいふ時く。西國とあるくらへやがる
詞となるべきまで。わざと未詳にかして めりのことゐしすあるなり。
これ我 府國言の大かるにの合なし。かの基係の「あるれこしの様さい
ぬめりとよまれども。古來の府んかく和くいあるし定めすかるむそう
まめりとしられなし。これまらずす。さん公なども「がの稍すす。
かゝつりひざるしとすゐるし。よしんあべし。文章に「何めくくつ
うるの詞多し。其ニモヨムナリ 俗語にま。医者メク 女メクなどいふ。このめくと
女詞も。めりを併めのめりとく。まんずるで医者をも女をも何もかれど

○那利身

なり　このなりをぐ。来なりとうひつより。上の有倫の如やるなり
くく後姓くなり。そのくこれあるの時のぐもりもなりぐ。此なり
さは上のけ下たぐのなり。有倫のなりにくう毎り
こあるなりとよむ。帰リコヌノジヤというなり。この那利身のなりにて
こをなりとよむ。声ガスルワイというなり。そのぐかめくまで
るなり。これひとのさをなぐる詞なり。くくくらぐ。こうさ

乃事に持あくあるもの。くくくあるさは心下高
詞なり。ものくぐ

炭　おこさぐれ中の乙乃ねをそうるなり　切牟
奈白ノ又たのくそ炭ぐよりくく。後接この奈白。奈波なりそ。
さる人にくその奈白をそ炭ぐよりくく。後接この奈白。奈波なりそ。
中巳乃奈白をそ。そ奈白の奈波なりそ。
そうにく。その奈白よりも精のあるなり。
事をもちんくく。なりくくいれるさ。
きて奈波とおるる天奈波しくく
なりぐ。おの奈白がこうにみちくみ。
奈をそくくいうなのそ。そぐひとの奈白
せくうくれるもの。そぐひとの奈白

学びく

○かるかれかるくさなど、かるくさ

猿　相のまくら

○由久身

ゆく

これもまた装るれど。物こそさぐるふところ肘枕にくつうつもり。上のあつもりなどの條くくいつもごと。次第く二何ヲとらんなり。裳のけゆく。その物ゆくと行くさちなどて。時依の時く。これゆくへかりゆくなどて。その事ゆくまりなる形容なりつもり。栄依と掛詞のさぐりかるかりと

これ装と掛詞のさぐりかるかりと。これ人のみこゆくるもさぐりかるかりと。又猿みこゆくとうもるも。装かれこれゆく。又猿裏とつ手一回の歌の立てこれゆくるれこれゆくるれど。

かるのゆく事をもさぐり。かれ依なり。これもまた

猿　かるくさ　葛城ノフモトヨリと

苔　なくるもの

炭　枷の集れきれゆくるやや小松原

集　ほくぎのくまや左宮ゆく　島ひと川

日　燈びくまや左宮ゆく　賢のもれ

いづまる物そさぐりずく。その用ゆくないつるのうるべー

猿　えづかすくりゆくなどく寺

かるくさ

○句集拾遺百韻のもの評をもよく。一月の形次第に細き

さくら小評云。多結れん細く。次第の二字

俗なれど。おもしろくあり。この評

支考がんこ。頑くなりゆくこと。
げに病すくなくつぐ。形のごとくなる
ぞゆくとつぐ。支考がんこ。こと
俳諧に伝語にくせものこと。
らうたり。されど句意よわく

○阿不身

あつめ

これまた紫なれど。俳結にかゝわるもの。名ところ同じ。弟子
の句なるべし。いづれもあらずぼかなど。木の字をつゞくつゞけたり。
かの鵜が葺草（ウガヤフキアヘズノミコト）不合命の御名なども。即ここのつぢにて。御葺屋のさまをいひたるなり。御葺屋のさまをいはれ
ぬ。これにて此句の動かぬべし。されど此句。手井ルニモナイ 二井ヘ

ナイ かどの伝言にあるごとく。その国のさまをいふ句なり。手ぐいと云ふ
のたぐひなり。又ものおもひ。
つぼ葺めるつりみどりあへかなどの
あしふくつりみなくかどの句のごとくつくれり。集中

○也留身

やる

これまた紫と秋結にかゝわるもの。その国のさまをいふ句なり。手ぐいと云ふ
かどの伝言にあるごとく。紫なり。手ぐいと云ふ
紫なり。やるとなるぐ。やるがぐ。仕こなすことなり。やるがぐ。
ありそ。上古にくいふなり。上古にくいふなり。遣

にくそ・ヤだ想像のムこのこはこ
と不の字をつぶくつりゆるぐ
するるれそうどうめからをうかなり

猿　おやけのものくする雪内け　羽合

こわっのするく・佐にく伝言なり・これと寝ずべうぐ

○加奴身

かぬ

これなやくこ弟とうなる・ムえとっ同ご・物るっ種ざる
ムなり・くくくくく業掛よいうとうくらべ

荒　かやそうの中なり出りあるご胡蝶ル　歌仙
日　山るゆよ出咲こうあるはこご折　荷号
日　一下めぐり人ともうあるかどうか　尚白

出やすくかぬくくるぐがらぐ・くくくくわくべ・
利やすくぬとうるくムうゆくムうゆる事なさるあんこ・行りあるこう言・
ムこそゆうんこれぐるゆうれぬムなり・かるぐくやんくこぐべ
やれぬこ・コレハかぬ　やんとうなるひるぐくムうこのぶなうとあるべ
コレハぬナリ

○かぬく　かぬ川かぬ川もう移一なぐはうなり

集　蚊を鈴出やすうの上　芭蕉
日　月よ名　湯尾　はこうのそれいよの林　日

○被身

る

これをくくるるこるるなぐみるよそあぐ・それい
紫の来こうまのなり・これくる伝よ二ルルなぐる者なり・まるこ

つつみて二タルのみなり。「いそぐ」
引 ものは「すみ」すごくわざとせんをもつるよ。茶よりもくに自
然とおちつきくるんでうするのんうつくしきものぞ。
き。月の人ものを負て仮すめく。ワがうちぶし。こゝも
人のうちあるべきものぞ。上ノ句リノ条下ニイヒレ。ワガ
これをれとかてゝいつもの所ニ仮ありて。きは一例ニ上ニ
ちかくニ仮あり。きは一例ニ上ニ
炭 麻の種毎年一時まるもの花 梨
きは二例を。むかしものまでもあげたるさま
なども。「ゆく」「やる」などつゞれ
炭 かるもの 嫁のもあるべき 梨

六ノ廿三

続 おもひ事一ツ二ツ 橋の雷 芭蕉
仮引ことゝ。引ことゝ。ことゝ。
「なげる」「なげこす」ことゝ。ことゝ。
しろくかなりやくさまなどつゞれ。
かるうつくさをつゝんでうち。はのなき法師。
ものやうなるうつくしきものや 梨
炭 栗谷苅ものゝ畠地 梨
集 物白し 芭蕉
月 降れぬ雨夜のものや鶴を盗られ
月 せんなくも志す 梅姫 月

○令身

寸

これらは俗言にて、サスセルなどいふ詞なり。今はしてなされといふを、流サスの心なり。わたされといふを、渡サスの心なり。いはされといふは、イハセルの心なり。それ故しく立やうもある義なり。

集　日　吹とばす石は浅間の野分哉　芭蕉

日　その木の実を禁らするれ秋乃風　日

日　猿　うきわれをさびしがらせよかんこ鳥　日

日　鰹売いかなる人を酔すらん　日

続　月さびて仮の寝にすることやらき　日

おしもやしもしかしくつけさり。いづれも御法勝の心のあるなみくたるべし

猿　一とせをまれに来るや節季候　丈草

日　弱法師わが門ゆるせ餅の札　其角

日　いとゆふは白川のぐせつくり獨活　砂力

これらは甲例にすぎず。いづれも装の来乃祓（エ）鉢にかなひたるなり。もと「覚す」「ゆるす」「のぞす」（ゆるすヲ装ノ　ホトイフ）といふ詞のりよめく。全する詞とかわるべく。拝娘しかれど、混ずべからず。

春　さまざまの事おもふ湯乃山　旦藁

これも稲上にほぐく。「つく隙」は詞の祓（エ）鉢にかなひたるなり。今する詞にあらず。この例にしかるべし。これらは「ゆる」を「ゆれる」「ゆるを」「ゆるる」などは詞の例なし

炭　むまあはかへり人にあひまちまち　芭蕉

日　壁を出て鳴ねや夕月　日

日　のこぐものかくまれ荻枝　岩翁

集　また取るは花しみやかりの夜哉　芭蕉

これらの句を正しく此の例なり。よく／＼考へわくべし

む

むとこれ、推量る詞の結びにまはる所なり。御結構
にもとめ、心ゆるがしし、上古よりしとつとめる所なり。これ
ど、是をつらず。むとのみ多くつかへり。これは上の字ぐりて
おすべく、サスルなどらせん。さて「かわせる「ほしせるなどなく
むなり。されどすとむとく、佐渡麻績のさじめく所あるは略
すらみせん。おのおのすらく、そのわざをさぐしむるとをし。むと
いふ詞く、このわざを能く定まる心なれど、内外のさじめあり、上古
まで此いふく、手爾にこの句を定めんとく、外へわざはすぐ
しかゆきかうしむる事からとさるべし

集　雲をり／＼人をやすむる月見哉　芭蕉

す　○為身

これまで紫なれど、御結構しく川にて、たとへて同じ。さて
で「花のうずする「忍そしてなまらのれや。わざとするとして
はあら猿ど　さる形容なるとて、あすくする詞と

集　眉はきを俤にして紅の花　芭蕉

月　龍門の花や上戸のみやげせん　日

伏見ノ任口上人ニ逢テ

日　わが衣にふしみの桃の雫せよ　日

猿　さうして卯花つゞむ添生れ　山川

荒　二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

これらいづれも此例にて、手爾葉く、事を為るといふ詞となりく、
心を発す情を形容する詞となるべし

集　やどりせん藜の杖になる日まで　芭蕉

続　白雨や中ぞりしく蟬の声　四季
猿　月入やしづの妹の振扉　寺来
続　昼ねおそくものごとやむ園かな　杉風
猿　ものくふかくふる京をして　凡兆
春　羽織なる人一人をみそかに　曽圭

○如身

ごとく　ごとくごとくおとくごとくつつ
つゝ・ごとくとつゝ・文章のみくちより・ノヤウニ　ヤウニ　ヤウニアル
ノヤウナなどゝ・俗語よりつゞる方

別なごのんなどゝ・濁音のまゝつゞる方
ごとく・なごくまゝの物事をつゞる方
をひとつとするなどゝかなづかひ・音の妙おりめべし・さゝ歌
なりのまゝわがのあごやとつゞる方
丁ど同じまゝなるとゝ・俗語ごとくまゝつゞる方
京ぶり物の持あいまゝ前句あるをうけて・当方をひとつ
をうけて・
続今晨　うの声村あくる
物うごぶしくの小川の岸よ出れとも
支考

この如くつゞるまゝつゞる方は

集　つま隠すひばりをそゝる蟬の声　芭蕉
日　月をあれぬ

○上古ニハ。なすてふ語アリ。即如ノ心ナリ。こゝにあり
まさなきなどあり。それと如くなすてふ語ハ。別ケテ上古ニモ
如ニてつゝひゝり。この差別ヲ。吉歌脚結ニくらべミよ

○八隊
○美隊

みこれを。てをこゝにくゝ。跡とゝめなどゝ
云なり。かゝる山ゝをも伊佛ニかゝるる詞なり。
伊佛ニうつるさまあり。佐ニのサニてふ詞ニあるんやくゝかくゝ。此
例ニいまゝ移ど。伊勢物語ニ。
くるゝ多し。こゝにて。此ものゝ佐ニ
がしとそなりけり。それが時佐ニ

かりてふ也。この佐ニのサニてふ詞。ニヨツテとゝ云詞のやうなれど。
それハ。此ニてハ。此をゝきて詞かゝりて。こゝろ
出所あるとゝきて詞かゝりて。こゝろ
そのつゝれる理ゆゑにかゝるんかゝり。なるべくだ。暑イニヨツテ労レタリとゝ云詞。
いくゝ異なれくゝしく。懐るんかゝる也。この心ばえのかゝり
別ケてもゝべし。佐ニのニヨツテハ。まべくとゝ云詞ニあるかゝり

拾　神ながら神さび行ニヨツテ田葛の葉ニひるがへるかも　苔莖
冬　かげろふの夕ニヨツテ山の端ゆ出る月かも　野水
月　うら川ゆ舟出ニヨツテ朝風ニ帆をあげ行ニヨツテ　奇子
春　前句ニ世の鄙ニをゝきて。萩織る笠を市ニ着ニヨツテ。後句ニいと会
ふ川ゝの時。コノ前後ノ句共ニみニ手合タリ
肌さむゝ一夜ゝ骨をかぶくゝ　月
世句ハさむゝノ下ニ詞ヲ置セルナリ。ソノ置語ハ。衣ナ
ド重ネ着ルコトイフベキヲ。下ノ詞ニテキコエレバナリ。

人ハ是非一度ハツヒニ骨ヲ　おドクニイタルベキ身
ナレバ・肌サムレトテウレフベキニアラヌヲ・猶衣ヲ
カサネ着ルコヨトノ心ナリ・古人詞ニカアリシコゾ
一句ニテモ見ツベシ

さ

これらの何ぞのみかり　詞のまゝなれど・その心ばえあり・みと
いつく・いげぎまで出ぬをもてる心なり・さくごろの類なり
その物ごとにもてる所を詞をやつぐ・たとへば
こゝろことばをこゝろことばとするなどの類
さるんあり・こゝろは・内より外へいけくもてするなればぐ・その類
さんつぐき事かり・俗言なる苦シレサともいふ・自然とこの
わうれあるうるる・上のみを・俗言のサニあつれぐど・こゝと古のめく
さとみて別あり・さればぐ古言と俗言とをうつる事・くりくいつぐ・
無かるべし・凡詞のをくくさんこと・経緯一五十
音しの条と知

より外のこゝろあるまじ　詞のまゝなれど・その心ばえあり・みと

猿　けさ　牡丹の花の真裸　李東
荒　芸舞やうなのまれぐごろき　文雄
猿　さびさんに客人やとふりか　尚白
ロ　雪ごこうあるの　梅さん　春来
ロ　あくれさや　肩麻うる　春のうる　梅市
ロ　京祇園までの月うら　雨仲間　文草
日　ちりうる　長岡さ　野坡
黄　門出うくぶるめてゐる　西白さ　芭蕉
日　たゞ寺舞さにロすぐ　うち　利牛
日　師走は丘尼の　祝儀さむさ　孤屋
続　作ぶり　加減のちぐ　夜うさ　馬莧

引 むすこ ふたり ちゝ
冬 生びん 飯基のごく月の雪
員 旅する ふたりの こゝろ奇蹟
猿 口の号 盟の座乃 機(はた)
荒 こゝろ ねいろ 神の詩
俵 うつ 麻布の笑もと無
日 自由や月を退り玉巨 憧
日 生する 店のかこみ 号
炭 ひそ 花 のよひ
猿 第一 員 雲の蒸鉄のさゝ 脇力
日 メがね よびめくつきうつ 羽紅
荒 ねを ふたり町の 吟
炭

続 祖 ふたり人 冬の根乃 法圓
日 炭ゆ 人 名の 素読
炭 人 園壽 野坡
日 すゞ 俵 侍町の 笑 炒
俵 さび 員 井の扇乃 去来
荒 市 俵 市 祖父 枢先
日 すゞ 炭 息 祖父の 盛水
続 塚 市 百姓 牛の扉 川乃 汗七
日 万 夏

猿 ちる時のこゝろ安さよ芥子の花　越人

月 晝顔に米搗の凉むあはれさよ　芭蕉

炭 鴫ずさわぐしさる斗の霜　孤屋

猿 この筋は銀も見しらず不自由さよ　芭蕉

○久隊

[く] これく、「つぎと「うちうち」「かけなゝ「うちもなどかくことし、その事なり。此くさの手もちくいふなり。ふるくて「あるくなり」など此ど文さるだちのんなり。「ある人はいさくとぞ。その人のものなる事なりとと。されとすゑくいふことなる。これはそれも人のとぞ。そのうちにつくおゝやんでなかなか。集中ニ例みえず

○前にも。らく　引く　引まく　又引トモイフモ　さてくくいへり。らいけるかなと、上

る詞なるがりくなり。もらくかどは即これなり。光トイフ物こいふごとのんし。すべくトイフ物トイフヿなどの俗言なるかれぞう。

○介隊

[げ] 「をしげ」「あるしげ」なとにてはやゝ。これくはくけにて異のんほく。それを濁りたるなり。されどさくばへ「あし」などのもあるらくよあらく。さりてをしとみえんがいへよく。なれば。をしといふよく異(コト)あるかたぶら。將ひちつめなおびゆるんなり。げとしいひて。濁音ノ前ニイフガゴトシ　例集中にみえず

○加之隊

こゝろく俗言ニ タガヨイハサテ ハテソデハアルマイカヤ ジヤハサテ
かなどいつゝゐて・此ごとの語俗ありて・こゝろくほくする詞なり・仏世ニそ
しれを後の詞とうつす時・その語勢のかろ〳〵しくなどいふ・古の如くこゝろぶか
かり・西行上人の歌にやあらん
のりをみるべー・これをもくもる詞なるべー
後の詞をもて・其ごとく俗語ありて 荒木田久老 千観ず 松枝 馬もかせうし 年のくれ 基角
まどくれ・仏語ごとかくのごとくなる事なり
有國曰・こゝ尊き人のさとれつゝなるより・仏語ごとく伝
言のまゝを用ゐるものなれば・守りて自在なるべし・そ
うでなくも・守よりほかすべき事なれば・
此ごとく・言語の通路なる時の事なれば・

言語ごとくつゞくべし・守し豊臣公ごとく
益のわざごとくもし・こゝごと・仏語ごと俗言ごとは
う自在さたひろくなりぬるの言語道断の時乃
用ゐるごとくなる事あるものこゝで 松のまご宗
用の詞ハ・官用ごとくんかゝるごと
うべー・又いくさの詞ハ・鐵砲の
術医ごとくんぐんうん・又一般のごとくに
めごとくいふて・夜めくごとくみな
出家の用なれぐごとくこゝろぶかき事あるべし・
仏語のおこなうごとくなるべし・これ詞ニ自在なるより
難かしぐ・仏語ごとくこの類ひ・これ詞ニ自在なるより
語ごとくぶぐ・なりぬるなれど・詞の不自由なる

なく

○奇傳隊

上古くなりぬるよりの事にて、不自在なること得あり。自在なることも失ひたるぞとぞ。

一事のうへに今一事のさはりあるもの。わが愛天地の行為なりとも

きゐるなるべし。

○母乃隊

まことの物なる故に、ゆゐつぐべきいつぎぶと。御結界のうち。また

事なきあれ。世になそれはなしかためざるもの故。くるしくいふ時の
詞なり。俗にもいふなり。オカシイ物ジヤ　イラヌ物ジヤ　などいふ上
これや。道理ナモノ　ワケナヿ　理屈ナモノ　チガヒナイヿ　などいふ俗
語にあたるなり

荒
集

朝がほは　そのまゝのみてくるゝすの　荷兮
さくぶれにくれぬものや　花の梢　芭蕉

○八多隊

〔格〕これは。詞の中また上にもつく句にて。その上中につくは
挿頭にも。くくく挿頭脚結にもみえたり。されどいづれも。
また『あまたといふ詞の。末のそぶりあるなり。上にはややおほく
おのづから上のてにをはも。かなへるなれど。実はみな同じ詞なり。脚

結辞は。セウヿモナイヿといふ意にあたることばなり。此俗語の
ならぬことなるに。すなはち『あまたといふ詞に合ふなれども。それが
假借に『の衣袖くさのにし　さようすがにかくれて此ほどの意
あるといふ辞に。さなくかくれてもなきなり。うちあるてに所
いかなるはなれど。かやうにつきたる心ばへを比なるにも
いふなり。されどこれは。ワガむねにすむ所あるべく。さらにその
心ぼへのごとくあるは。序辞のごとく用ゐるなり。此例よそのこと
なるもあるを。わがみのおかしきのほかに。自然の勢よりつづくを
かなふるべし　第二にこの語を為當とかけるも。ハタトアタル
といふ俗語のいはく　假されたる文字なるべし。さりとてそのハタトア
タルといふも。即今いふ所の意に稍なるなり。ワガむね筋よく
すまぬ論なれど。やむしくみえぬ筋の。その事につけてたがふ

ばかりの詞なるべし。集中例多し

○加天隊

かて　この詞、難の字をよみたるあり。今も云ふことあり。青苔のごとき物なる事しるべし

人多し。おなじくかてぬがてなどよめるごとく、雖の字の意あり。つまり不難のことなり。かつて曩きんぢかつてあり。おなじ。乃ち者しるすべく。さて勝の字のんにて、難の字をうつしたるもの。かつ、被勝しらみをうつしたるもの。例しるすべく。まかるし。ここらを用のごとくなるもの。もし漢字などの例を。つぐ国本来の詞なり。字のごとく漢土より来るものにて、我国の詞よ。うるさの字をかくごとくあれ。

このよ。例多かり。字のごとくまし。ここらにもよくあれど、これをよく発音する人多し。字をたゞしく本例をまもるべきあり。

くそでくるめ。くぐつ　あるべきあり。

さるあり。漢土よりきたるなどいふ詞。蓋恰の字をかくごとく。

字のごとくよむべし。ワ国本来の詞なりとも。さもぐ例ぞ。雖の字のごとくよむもあるにて、かくごとくなるもあり。それのつぎまもるにて、被勝のかつ。出るつぎすぐるわざのやうなれど出るつぎのごとくよむべし。

うるさ　さて、さの字のがくるハ、不被勝のごとく、おそれもはづくるのごとくよむべし。けがよごれなどの方のごとくよむべし。

のうるさ。ぞねハ。うのかたのごとくよむべし。

イヅレモ羽ニイヘル方ハ客ナリ。陰ニナリタル方が主ナリ。コレニカギラヌコトナガラ。ナホ心ウルメヨリニイフナリ　さるよるさて

俳諧天爪波抄巻之六　大尾

南薫藏梓

文化四年丁卯仲冬

皇都

浪華

東武

野田治兵衛

中川藤四郎

佐々木惣四郎

葛西市郎兵衛

橘仙堂善兵衛

柳原喜兵衛

野田七兵衛

京師三條通升屋町

御書物所

出雲寺和泉掾